

文 献

- 1) 安藤正次, 1956: 北半球の空気量の変動から見た大気環流(第2報) 研究時報, 8巻9号,
- 2) Staff Members, Academia Sinea, Peking, 1958: On the General Circulation over Eastern

Asia (II), Tellus Vol. 10, No. 1.

- 3) 高橋浩一郎およびその協力者, 1952: 気象現象における周期性, 研究時報, 4巻, 7号.
- 4) E. Würzburg, 1951: Beiträge zur Statistik mittelanger Luftdruck-wellen in Europa, Deutschen Wetterdienst U. S. Zone 20, 3~20.

〔書 評〕

日本の季節——動物編—— 大後美保著

200円, 1958年3月 実業之日本社, 220ページ.

日本の季節——植物編—— 大後美保著

220円, 1958年5月 実業之日本社, 228ページ.

季節学を多年にわたって研究されてきた大後美保博士の、一般人むきの著書である。動物編、植物編とも、最初に季節学の簡単な解説を述べる。人生とのかかわりあい、季節現象について、観測はどのようにするか、日本における特長はどうか、といったことである。次に、早春、春、初夏、夏、秋、冬(植物編だけ)の季節にわけて、動物は42種、植物は52種、それぞれについて、そのときの季節現象を取りあげている。各種とも、記述の内容は、その随想から始まり、その形態・生態などを述べて句や歌で切りあげる。それに続いて、季節学の調査結果の紹介として、どこで何月何日ごろに咲き始めるとか鳴きだすとかという記載がある。それが、最低気温何度ごろの日に相当すると付け加えられている。

読後感を少し述べさせていただく。書物全体から受ける感じは、内容がかなり豊富であるにもかかわらず、少し平板なことで、教科書的な価値があるが、その代りに、どこにといった焦点のない欠点がある。それは、先に紹介した随想—形態・生態—句・歌—季節現象という説明の構成が、ほとんどの種について、極めて規則正しくまもられ、文章に若干の長短はあるが、かたやぶりがなためである。これを逆に言えば、歳時記のようなもので、座右にそなえて季節に応じて開いてみると、どこでも役に立つことではある。

読者によって興味を持つ部分は違うだろうが、筆者にとっては、随筆風の書きだしの部分が、どの種についても一番楽しかった。「サクラの花は、並木として、または集団的に咲いているといっそう美しいが、モモの花は、あちこちに一、二本咲いているほうが情緒があって美しい。こんなことから、モモの名所は少ないのだろう。」といった文章が印象に残る。

季節学の立場からみると、説明にもう少し注文がでよ

う。以下、気の付いたことを列記する。(1)文章の中で、季節現象がどこで何日にできるとそれぞれ記され、それが、日最低気温でほん訳されている。動物でも、植物でも、そしてその現象の内容を問わず日最低気温が最もよい目安なのだろうか。あるいは、単に日付の代りに日最低気温が何度と示されたのだろうか。地方によって、その温度が違うのだから、その事情がやはり知りたい。土地によって、現象と対応する気温の違う理由なども書いてあると面白い。(2)日本における季節現象の等期日線図がどの種についてもでてきて、そしてこれが本書の挿図のすべてであるが、図中の線の走り方の意味づけが欲しい。ほぼ等温線の走り方と似ている図が多いが、まったく同じでないことはもちろんである。例えば、アマガエルの現われる時期の図は少し複雑であるし、セミのなき始める時期の図は、ニイニゼミ・ヒグラシ・アブラゼミ・ミンミンゼミ・ツクツクボウシのどれでも、その他の動物の図とかなり違っていて、本州の中における差が少なく、かならずしも南が早いと限らない。これはこの現象が夏に起るためなのか、それともこの現象の特性なのだろうか。(3)植物でも同じようなことがあり、秋の花は北から咲き始めるが、7~8月に咲くキキョウ・オミナエシ・ハギなどは南からでも北からでもなく、特別であって、その局地性が興味を引く。このあたりにもう少し説明があると、季節学の有用性も、読者に自然と理解されるのではなかろうか。

以上は、季節学の教科書とみた場合の注文である。随筆風の文芸書とみると、また批判は別にあると思うが、筆者はそういう批判の資格を持たない。ただ、季節感の表現はひじょうにむずかしいから、一部の人々の感覚には、「人生とのかかわりあい」と題する本2書の最初の6~7行は、びったりこないかも知れない。例えば、ゲーテはヴェルテルの心の動きを、「自然が秋に傾くにつれて、僕の心の中と僕のまわりにも秋が訪れてくる。僕の葉は黄色になる。そして、あたりの樹々の葉はすでに散った。…」と描写したが、季節感によったこのような表現でさえも、ありきたりでつまらないと評する人達がいることである。(吉野正敏)